

(閉会の言葉にかえて)

## —アレルギー性気道疾患における環境真菌の重要性—

石川県済生会金沢病院 呼吸器内科 小川晴彦

真菌によるアレルギー性呼吸器疾患では、感染症とは異なり病巣局所に原因真菌の感染所見を認めないため、画像や血清学的な検討から間接的に診断されることが多い。ABPAを疑い、アスペルギルスに対するアレルギー反応を有するかどうか診断基準にあてはめるだけでは、種々の真菌によるアレルギー性気管支肺真菌症を診断することができない。ABPMの診断基準は一見煩雑であるが、気道における真菌アレルギーを基本病態と考え、1) 喀痰から同一真菌が繰り返し検出されること、2) 喀痰、BALFで好酸球増多を認めることを主所見とし、気道検体から培養同定された真菌抗原に対するアレルギー学的所見を参考所見とする。さらに、臨床所見としての気道所見、肺野所見を確認してゆけば、診断のプロセスは容易になる。我々が提唱したこのABPMの診断の手引きから、肺野所見をはずすと、そのまま難治性咳嗽Allergic fungal cough(AFC)の診断基準に応用できる。これまでに、Basidiomycetous fungi (BM) のひとつである*Bjerkandera adusta*はAFCを引き起こす環境真菌のひとつであることを報告してきたが、地球温暖化にともなう山野のきのこの群生により、今後さまざまなBMによるAFCが報告されることが予想される。近年注目されつつある難治性咳嗽Chronic idiopathic cough(CIC)の一部も、真菌アレルギーの視点から解明される可能性を残している。